



# 対がん協会報

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です  
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F  
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

第645号 2017年(平成29年)  
1月1日(毎月1日発行)

主な  
内容

- 2面 日本対がん協会と「グローバルブリッジ」が提携始動
- 4面、5面 MOD奨励賞現地レポート
- 6面、7面 冬のチャリティー特集
- 8面 がん教育DVD完成

## 2017年を迎えて

# 患者支援・禁煙推進・検診研究、山積する課題解決を目指して

公益財団法人 日本対がん協会会長 垣添 忠生

明けましておめでとうございます。日本対がん協会は来年、設立60周年を迎えます。還暦を迎えるにあたり、組織として生まれ変わりを模索する必要があるのではないのでしょうか。

私どもは設立当初よりがん検診に熱心にとり組み、全国46支部で、現在年間に約1,100万人の検診を実施し、約14,000人のがんを発見しています。わが国で最大の、もっとも信頼に足る検診機関と申せましょう。

昨年より本部にがん検診研究部を新たに設け、前述の膨大なデータを科学的に解析する作業に着手しました。これからのがん検診は、人口の減少、新しい診断技術の導入等、従来なかった事態に対応し変貌していく必要があります。

本年6月頃を目途に、本部の中に「がんサバイバーズ・クラブ」を立ち上げようと準備を進めています。日本対がん協会ではがんに一度でもかかった人のことを、「がんサバイバー」と呼んでいます。サバイバーが孤立することがないように、家族や友人(ケアギバー)が寄り添い仲間(ピア)との支えあいを強化することは、今や世界の潮流とな

っています。がんサバイバーズ・クラブでは「がん最新情報の提供」や「患者同士の交流の場づくり」、「がん相談の強化」などにとり組みます。

現在、サバイバーの数は700万人を下らないと推察されます。そしてがんは誰でもかかる可能性のある病気であることから、予備軍である一般の方を含めれば遠からずその数は1,000万人を超えるでしょう。仮にその一割の人たちが会員になって、若干の会費を負担いただければ、がんに負けない社会を目指した国民運動となりましょう。その資金を元に、サバイバー支援の活動を本格化する予定です。

日本対がん協会は、米国メイヨークリニックと組んで、本年より3年間Global Bridgesと呼ばれるたばこ対策にとり組みます。2020年の東京オリンピック、パラリンピックを見据えて、わが国のたばこ対策・禁煙運動を国内研究者、関係団体の協力を得て強気に展開します。たばこ対策は日本対がん協会活動の原点の一つですが、これまで十分に対策を進めることができませんでした。

働く世代のがん患者が増加し、がん



の治癒率が向上する一方、経済・雇用環境が激変したことに伴い新たに生じた問題として、がん患者の就労支援があります。がんサバイバーズ・クラブの重要な活動の一つとしてとり組みたいと思っています。

それ以外にも、がん相談ホットラインの拡充、がん研究者に対する助成金交付、若手医師海外研修派遣、子どもに対するがん教育など、進めるべき課題は山積みです。

当協会のような民間の対がん支援活動に対する国民の期待の大きさを考えますと、覚悟してとり組みを進めたいと思います。年頭にあたり、本部・支部の皆様の御理解と御支援を切にお願い申し上げます。

**がん相談ホットライン** 祝日を除く毎日  
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

**医師による面接・電話相談(要予約)**  
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

# 禁煙推進力強化に向け 日本対がん協会と 米国メイヨークリニック「グローバルブリッジ」が提携始動

～着任のご挨拶にかえて～

日本対がん協会参事(禁煙推進・対がん事業開発) 望月 友美子



パートナーシップを結び握手するJ・テイラー・ヘイズ  
グローバルブリッジズ会長と垣添忠生日本対がん協会会長

禁煙は「がんの予防は禁煙から、がんの治療も禁煙から」です。肺がんのみならず、多くのがんの予防やその他の生活習慣病予防に役立つだけでなく、喫煙を続けるとがん治療の予後にも悪影響がもたらされることがわかってきました。

日本対がん協会は、2003年のWHO たばこ規制枠組条約の策定及び健康増進法の制定を機に、同年のがん征圧全国大会で「禁煙宣言」を採択し、禁煙推進を活動の一つの柱としてきました。

しかし、ニコチン依存症管理料の制定や、受動喫煙防止条例の策定、たばこ増税など、国や地方自治体のたばこに関する政策は変化してきたにも関わらず、がん対策基本計画での成人喫煙率12%という喫煙率削減目標の達成はいまだ遠いのが現状です。

日本の約2000万人の喫煙者に対する禁煙しやすい環境作りは、国際水準に照らし合わせると三周回遅れともいえる状況であり、むしろ禁煙しにくい環境が作られていることが課題です。

たとえば、禁煙外来の普及や公共施設・職場での禁煙は、禁煙の動機づけや維持を高め、「禁煙しやすい環境」につながります。しかし、日本では喫煙所が増えており、たばこの価格が安価でコンビニなどで簡単に入手できたり、メンソールたばこ製品など依存性の高い製品や、加熱式の新型たばこ製品が販売されたりなど、「禁煙しにくい環境」が作られているといえます。

もあり、国の受動喫煙防止法制の動きも活発化しています。

このようなたばこを巡る課題解決のために、日本対がん協会は、禁煙治療プログラムで定評のあるアメリカ・メイヨークリニックの国際的な禁煙支援プロジェクト「グローバルブリッジ」と提携して、禁煙治療に関わる専門育成とネットワークを促進するための、助成金執行に関する日本側窓口として協力することになりました。

助成金の公募は2017年度に入ってからになりますが、2018～2019年の2年間でどれだけの成果を生み出せるか、応募団体の斬新なアイデアと熱意にかかっています。課題の詳細が公表されましたら、日本対がん協会ホームページでもご案内する予定です。是非ご応募ください。

さらに、グローバルブリッジプロジェクトと並行して、関係団体や協会グループ支部の皆様との連携の下、協会のこれまでの禁煙推進活動をさらに強化してまいります。特に、2020年を

一方、2020年の東京オリンピック・パラリンピックまでに開催地を禁煙にすることは、IOC(国際オリンピック委員会)やWHO(世界保健機関)との国際的な合意事項で

目指した共有プラットフォームを形成するとともに、次世代の子供たちが依存性と発がん性を併せ持つたばこは無縁の人生を送れるよう、「タバコフリー世代」の育成にも注力していきたいと考えております。



また私は、国際対がん連合(UICC)日本委員会の教育委員長として多くの方々と研究討議を重ね、国のがん教育を専門的に支援できるような活動体「小学生からのがん教育を推進する会」としても活動しております。

引き続き、皆様のご支援・ご協力をたまわりますようお願いいたします。

望月 友美子(もちづき ゆみこ)

東京大学薬学部卒業、慶應義塾大学医学部卒業、同医学研究科博士課程修了。国立がんセンター、国立公衆衛生院などを経て、世界保健機関(WHO)タバコフリーイニシアチブディレクター及び同事務局長代理・特別顧問(パートナーシップと国連改革担当)。帰国後、国立がん研究センターがん対策情報センターたばこ政策支援部長を経て2016年11月より現職。日本学術会議連携委員。日本禁煙学会理事。第17回全国禁煙推進研究会東京大会実行委員長(2017年5月27-28日、大会長尾崎治夫東京都医師会会長)。



グローバルな禁煙推進力向上に向けて

# がん対策基本法 改正法が成立

## がん患者の雇用継続、がん教育推進を求める

がん患者が安心して暮らすことのできる社会への環境整備を盛り込んだ「がん対策基本法」の改正法が12月9日、衆院本会議で可決、成立した。

企業が、がん患者の雇用継続への配慮に努めることや、国や地方公共団体にがん教育の推進を新たに求めたのが特徴。来年6月には、第3期のがん対策推進基本計画の策定が予定されており、改正法に明記された内容の推進が期待されている。

がん対策基本法は2006年に、全国どこでも同じレベルの医療が受けられる環境整備や、政府が総合的ながん対策として「がん対策推進基本計画」を策定することなどを目的に制定された。基本法の制定から10年経ち、がん治

療が進み、治療後も社会で活躍できる人が増えてきた一方で、通院のため退職を余儀なくされるケースも増えるなど、新たな課題が出てきていた。こうしたことから、議員立法として改正案が提出され、議論されていた。

成立した改正法では、まず基本理念として、がん患者が尊厳を保持しつつ安心して暮らすことのできる社会の構築を目指すことを掲げ、がん患者への国民の理解が深まるようにすることを求めた。

また、新たに、企業側の「事業主の責務」を設け、働く人ががんになっても雇用を継続できるよう配慮することを明記。国や地方公共団体にも、事業主に対してがん患者の就労に関する啓

発・知識の普及へ必要な施策を講じるよう定めた。

また、小児がん患者らの学業と治療の両立に必要な環境整備や、症例が少ない希少がんや難治性がんの研究促進や、がん検診でがんまたはその疑いが判定された人が適切な治療が受けられるように、がん検診の実態把握など、必要な施策の実施を求めている。

さらに、がんに関する知識やがん患者への理解を深めるために、がんに関する教育の推進のために必要な施策も求める「がんに関する教育の推進」の項目を新設。民間団体が行うがん患者の支援活動や、がん患者団体の活動等を支援するため、国や地方公共団体が必要な施策を講じることも盛り込まれた。

## 約9000人が啓発活動に参加

# 2016年度ピンクリボンフェスティバル報告会

ピンクリボンフェスティバル2016（主催：日本対がん協会、朝日新聞社など）の報告会が12月8日、東京・千代田区の有楽町朝日スクエアで開催された。協賛企業や支援団体、開催地の自治体などから約60名が参加して、今年度の取り組みを報告した。

主催者を代表して、日本対がん協会の秋山耿太郎理事長が「ピンクリボンフェスティバルは来年、記念すべき15周年を迎えます。ひとえに協賛企業や自治体の皆さまに支えられてのことです。今後ともご支援やご助言をお願いします」と感謝を込めて挨拶した。

ピンクリボンフェスティバル運営委員会事務局プロデューサーである日本対がん協会の岸田浩美マネージャーが今

年度の活動内容を詳しく報告した。乳がん闘病中のフリーアナウンサー小林麻央さんについても触れ、昨年度の北斗晶さんに続き、著名人の闘病の影響で乳がんへの関心が高まっており、正しい知識を啓発することの大切さを訴えた。

イベントにフル出場したモモ妹も登場し、ソニーネットワークコミュニケーションズの陳欣盈(チンシンエイ)氏がモモ妹の活動報告をした。ピンクリボン活動10周年である今年は「デザイン大賞」で設けた「モモ妹特別賞」の特別審査員を務め、東京ウオーク大会では表彰式のプレゼンターとしても登壇するなど大活躍だった。

協賛企業・支援団体を代表してクレハの関根吉信氏と、NPO法人大丸有エリアマネジメント協会の榎井あゆみ氏がそれぞれ今年の取り組みを紹介した。社内でも啓発活動が盛り上がって



感謝を述べる秋山理事長

いる様子や、女性が多く働いている大丸有エリアで乳がん検診や診療が受けられるクリニックマップを作成した取り組みなどを詳しく報告した。

続いて、フェスティバル開催地の仙台市と神戸市の多彩な取り組みを、仙台市健康福祉局保健衛生部健康政策課の早坂江美子氏と、神戸市保健福祉局健康部健康づくり支援課の佐藤唯氏がそれぞれ紹介した。

報告会終了後は恒例の情報交換会で、会場の参加者たちも15周年に向けて改めてピンクリボン活動への決意を新たにしていた。



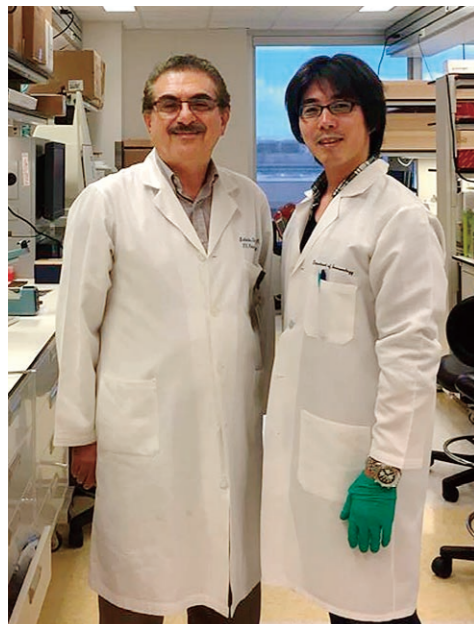
今年も大活躍したモモ妹

# マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞 2014年度受賞者現地レポート「MDアンダーソンで研修を始めて」

リレー・フォー・ライフ (RFL) に寄せられた寄付金をもとに、地域のがん医療の充実をはかるために若手医師を奨励賞としてアメリカに派遣するRFLマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞を受賞して、現在テキサス大MDアンダーソンがんセンターで研修中の、三浦裕司さんと森川直人さんから現地レポートが届きました。

がん患者や家族の夢をのせて、慣れない環境の中でも必死に研修に励むお二人の様子をお伝えします。

## 虎の門病院 臨床腫瘍科 三浦 裕司



ラボでメンターであるSalah Tahir先生と

日本対がん協会主催のRFLマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞をいただき、2016年2月1日よりMDアンダーソンがんセンターでの研修を開始し、すでに半年以上が経過しました。

私は、泌尿器腫瘍内科、免疫療法プラットフォームという部署で、基礎研究に従事しています。基礎研究と言っても細胞株やマウスを使った研究ではなく、患者さんから得られた検体を使用した研究ですので、トランスレーショナル(橋渡し)研究に近いものです。

### 先輩に脅かされて戦々恐々

実は私自身、日本にいたときは臨床研究に従事しており、基礎研究の素養が全くありませんでした。初めての経験を英語の環境下で、しかもMDアンダーソンという世界最先端の施設であるがために、ある意味世界一競争の激しい環境下で始めることになったわけです。しかも、私の所属するラボでは、私は初めての日本人であり、ラボのあるSouth Campus Research

Building 1の中に日本人は私だけ、という完全英語の環境に飛び込むことになりました。

話は少し変わりますが、私は旅行が好きで、自分が行ったことのない場所に行き、見たことがないものを見たりするのが大好きな人間です。しかもそんな場所にちょっと体力的負担を伴った方法で(自転車一人旅とか)行くのに快感を感じるタイプです。そんな私にとっては、最高の環境が整ったというわけですが(笑)、先に留学されている方達から、「何もできないという烙印を最初に押されたら、その後何もさせてもらえず、半年間で解雇された研究者もいる」などと恐ろしい話も聞いていたので、最初はただただ不安ではなかったが、ありませんでした。

### 厳しくも温かいメンターの指導

そのような中で私の研究生活が始まったわけですが、非常にありがたいことに、私のメンターであるSalah Tahir先生は、私が基礎研究の経験がないことを当初から知っており(履歴書に記載しておりましたので)、「A to Zで教えてやる!」とおっしゃってくださいました。

しかし、最初は慣れないことに失敗ばかりの毎日でした。ただ、Tahir先生は、その際に、厳しいながらも、「失敗することは悪いことではない。私もこれまでに何度も何度も失敗してきた。ただ、その経験を活かして、常に自分のやっていることに自問自答しながら、注意深くやっていくことが重要だ」と、注意だけでなく、次につながる言葉もかけて下さるなど、非常に繊細に、そして粘り強く指導をしてくださりました。

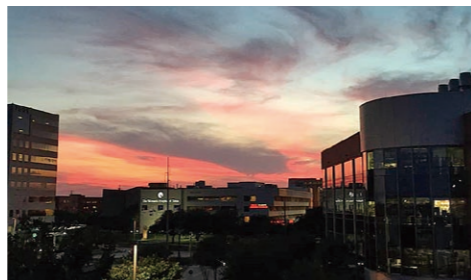
これは、MDアンダーソンがんセンターの特徴なのかもしれませんが、教育に関する意識が非常に高く、私が所属するラボだ

けでなく、隣のラボでもこのようなメンター・メンティーのペアで指導しながら研究を進めていくという光景をよく見かけます。おかげで、今ではだいぶ失敗も減り、自分で行えることも増えてきたところです。もちろん、まだまだこれからも学ぶべきことが多くあり、留学期間も限られているため、これからも修行の日々は続きます。

### 免疫関連副作用の発現予測を研究

さて、私が実際に行っている研究の内容についてお話します。この数年間で多くのがんに対して著しい効果を示している免疫チェックポイント阻害剤という薬剤があります。これまでの抗がん剤と比べて副作用が軽いことが知られていますが、頻度は少ないものの免疫関連の特徴的な副作用が知られており、時に重篤な状態になってしまいます。しかし、これらの副作用発現のメカニズムについては未だによくわかっていないのが現状です。

私たちのチームは、この免疫関連副作用の発現を予測できるようなバイオマーカーを探る研究をしています。私のミッションには、「より効果的かつ毒性の少ない治療の開発」が含まれており、今回の研究はこのミッションに通じると思っています。まだまだ、結果が出るには多くの困難を乗り越える必要がありますが、患者さんたちの役に立つ日がくることを励みに頑張っていると思います。



ラボから見える美しい夕焼け

## 岩手医科大学 医学部 内科学講座 呼吸器・アレルギー・膠原病内科学分野 森川 直人



MDアンダーソンがんセンターでマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞を担当されているDr. Oliver Boglerと

このたび、日本対がん協会RFL マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞をいただき、2016年7月より、MDアンダーソンがんセンターで研究する機会をいただきました。日頃よりRFLにご協力いただいた皆様にはこの場を借りて改めてお礼申し上げます。

### ◇ 研修生活 ◇

#### 臨床医が基礎の研究室持つメリット実感

私が所属しているのは、肺がんを含む胸部と頭頸部腫瘍の薬物療法を行っている部門(Thoracic and Head/Neck medical oncology department)の研究室です。医学研究を臨床との距離で3つに分けると、①患者さんを対象とする臨床研究、②シャーレに入れたがん細胞やネズミを使った実験を行う基礎研究、③両者の中間で臨床検体を基礎医学の技術で解析する橋渡し研究(Translational Research)、の3つになりますが、私たちの研究室では②と③を担当しています。

ボスのDr. John V. Heymachは腫瘍内科医として臨床を行いつつ、私たちの研究を指導しています。臨床医が基礎の研究室を持っていることのメリットとしては、臨

床から得られたデータを基礎研究に直接活用できて、治療に応用するのに適した研究を行うことができます。また、基礎実験で良いデータが出た場合に、それに基づいた臨床試験をすぐに始める、ということも可能になります。加えて、臨床医を含めて定期的に議論することで、自分たちが行っている研究の方向性を見失わずに、患者さんの

治療を見据えた研究ができるという点は大きなメリットになっています。

ただ、基礎のスタッフと実験の設備を維持するには多くの予算が必要であり、世界有数の研究施設であるMDアンダーソンがんセンターだから実現できる、という側面もあり、簡単に「日本に持ち帰る」とは言えませんが、基礎の研究室との協力で部分的に実現できる、実現したい、と私も考えるようになりました。

私は日本では臨床研究が中心であったため、基礎研究の実験については知らない点も多く、直接の上司も含めメンバーに一から教わりながら進めています。私たちのLabでは7割ほどが女性、半分以上が米国人以外であり、Labの中でもいろんな英語が飛び交い、普段のおしゃべりから研究を巡るディスカッションまで盛んに行われています。私のつたない英語力ではついていくのがやっとなのですが、相手の「聞く力」に支えられながらなんとかやっております。

### ◇ アメリカでの生活 ◇

#### 南部のホスピタリティ体験、息子も成長

MDアンダーソンがんセンターのあるヒューストンはアメリカ南部、テキサ

ス州にあります。南部には「Southern Hospitality」といわれる文化があるようで、実際にいろいろな場面で声をかけてくれたり、世話を焼いてくれる人がいます。妻が子供たちと買い物にいったときにも、重いものを持ってくれたり、子供に話しかけられたりするようです。

5歳の息子はPre-kindergarten(幼稚園)に通っています。クラスで日本人は息子だけであり、初日は朝から帰りまで泣き通しだったようですが、あっという間に慣れて、2か月たった今は楽しく通っています。息子の英語ができるようになったわけではなく、日本語で話しかけてもコミュニケーションできるスキルを身に着けたようです。謎です。

### 離れてわかる日本の良さも

ネガティブな意味で、日本との違いを実感したのは公共サービスのあり方です。ドイツの autobahn(高速道路)が16年に公開した映画「ズートピア」はいろいろな動物が共生する社会を描いていますが、運転免許センター窓口はナマケモノであり、のろのろと仕事をしている様子はアメリカの免許センターへの風刺になっています。私たちも社会保険番号の取得に2時間、運転免許の申請に3時間は待たなくてはならず、窓口の職員もてきぱきしているとはいいがたく、また人によって言うことが違う、ということもしばしば起きて公共サービスはアメリカ生活のストレスの原因になっています。

公共サービスの運営費用を減らすために人手や給与も減らしたため、現場に過大な負担がかかっていることもあるようですが、住民票を「提出する」だけのために半日、有給をとらないといけない、というのはどうでしょう?日本でも「小さな政府にして支出を削減」という議論がありますが、それが実現した姿としてアメリカをみると「そう良いものではないな」と感じております。

スタートしたばかりのアメリカでの研究生活ですが、できるだけ多くのことを経験して日本に持ち帰りたいと思います。

チャリティー特集

さまざまなアイデアで私たちの

# 今年で10周年「ファッションを通じて乳がんについて知ってほしい」 人気セレクトショップのチャリティー・クリスマスパーティ

## 株式会社グルッポタナカ・IZA



最新作のファッションショー

株式会社グルッポタナカ・セレクトショップIZAは12月8日、大阪・北区のザ・リッツ・カールトン大阪で、ファッションを通じて乳がんを知ってもらおうというピンクリボンのチャリティーイベント「IZA PINK CHRISTMAS 2016」を開催し、約200人が参加した。

10周年となる今回は一段と豪華で華やかな雰囲気、会場内にはピンクリボンをイメージしたさまざまなデコレーションもほどこされた。俳優の渡辺裕之さんによる乾杯に続き、同ブランドの最新ファッションショーからスタート。料理やお酒を楽しみながら、モデルやファッション雑誌編集長らのトークショー、豪華賞品

が当たるチャリティーくじの抽選会、歌手のクリス・ハートさんのライブなどが行われた。最後に日本対がん協会の関原健夫常務理事に、「ほほえみ基金」への寄付金が贈呈された。

主催者であるIZA代表の田中タキさんは「たくさんの方々のご支援

のもと10年目の開催を無事に終えてほっとしています。日本対がん協会への寄付も10年目になり、今回はチャリティーくじの収益と、参加費の一部を寄付しました。微力ではありますが、これからもずっとこの活動を続けてまいります」と笑顔で語った。



クリス・ハートさんとIZA代表の田中タキさん

# ゴルフを通じてピンクリボン活動を長く支援 ピンクリボンチャリティー金贈呈式

## ジュピターゴルフネットワーク株式会社



じゃんけん大会ではゴルフ用品などをプレゼント

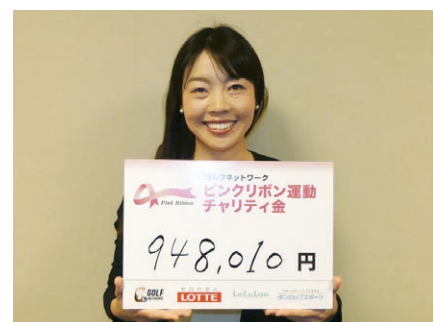
CS放送ゴルフ専門チャンネル『ゴルフネットワーク』（東京都江東区）は、12月18日に東京・港区の東京タワーメディアセンターで「ゴルフネットワークピンクリボンチャリティー2016 トークショー&贈呈式」を開催し、同社が本年度のピンクリボン活動で得た収益金94万8010円を日本対がん協会に寄付した。

『ゴルフネットワーク』はゴルフを通じたCSR活動の一環として、2005年から女子ゴルファーを中心にピンクリボン活動を行っている。12年目となる本年度は、都内のゴルフ練習場での「チャリティー試打会」や「チャリティーオレックス会」を開催し、参加者や協賛各社から寄付金が寄せられた。

贈呈式にはプロゴルファーの西山ゆかりさんがゲストとして登場し、女性としてピンクリボン運動にかかわる意義や、活躍した今年度のツアーを振り返って印象に残った試合などについて話した。続いて、西山プロからのプレゼントをかけたじゃんけん大会が行われ、会場は大いに盛り上がった。最後に、西山プロから日本対がん協会の黒

岩由香利マネジャーに寄付金の目録が贈呈され、日本対がん協会からは感謝状を贈呈した。

この贈呈式はプロゴルファーのトークショーやゴルフウェアのファッションショーなどのイベント「TOKYO GOLF FESTIVAL」で行われ、会場には多くのゴルフファンが訪れ、とくに女性ゴルファーの姿が目立った。黒岩マネジャーが乳がんについて話すと、多くの観客が真剣に耳を傾けていた。



西山ゆかりプロ

活動をご支援いただいています

チャリティー特集

# サッカー日本代表・香川真司選手が子どもたちのためにチャリティー活動 日本対がん協会「がん教育基金」へ寄付



香川選手を前にして大はりきりの子どもたち

夢を応援したい」「中学・高校時代を過ごした仙台市に恩返しをしたい」という思いから企画された。

小学生のサッカー・ドッチボールチーム、小・中学生の女子フットボールチームが対象で、2日間あわせて約600人の選手と、その保護者が来場した。



ドッチボールに挑戦

12月18日、23日、宮城・仙台市で「#ShinjiDream Cup in 仙台」が開催された(主催：香川真司選手、朝日新聞社)。このイベントはサッカー日本代表でドイツ・ブンデスリーガのドルトムント所属の香川真司選手が「サッカー、スポーツを通じて子どもたちの

23日のサプライズゲストとして、香川真司選手が登場すると会場は大歓声に包まれた。香川選手は、サッカーの技術を指導したり、各優勝チームとスペシャルマッチを行ったり、募金をしてくれた人を対象にしたチャリティー抽

選会を盛り上げたりするなど、終始笑顔で積極的に子どもたちと触れ合った。

今回は、子どもたちの未来のために役立てたいという香川選手の思いで、日本対がん協会の「がん教育基金」が寄付先として選ばれ、小児がん理解促進のためのがん教育読本「ともだち〜はくとゆう君〜」を作成する予定だ。

## サポーター企業訪問

### ピンクリボン活動を長年にわたって支援

### 株式会社クレハ

サポーター企業訪問第3回は、東京・中央区の株式会社クレハを訪ねました。同社はピンクリボンマークを2009年から家庭用品のNEWクレラップ、翌年からはキチントさんシリーズに付け、売り上げの一部を日本対がん協会の「乳がんをなくすほほえみ基金」に寄付しています。2016年は「ピンクリボンフェスティバル」にも協賛しました。同社の執行役員家庭用品事業部長の陶山浩二さんに、お話をお聞きしました。

して、ほほえみ基金に寄付をすることにしました。家庭用品のユーザーは主に女性や、主婦の方々なので「家族を支えるあなたを守りたい」という気持ちでピンクリボン活動を支援しています。もちろん、女性たちが健康で、未永く当社の製品を愛してもらいたいという気持ちも込めています。

する方々のための交流サイト「クレラップ・コミュニティ」や「クレハのピンクリボン活動」サイトを活



陶山浩二さん

——ほほえみ基金に支援を始めたきっかけは

「クレラップ」の発売50周年を記念

——今年ピンクリボンフェスティバルにも協賛されました

東日本大震災の時、主力工場であるいわき工場が被災し、操業停止しました。その年のゴールデンウィークに、ボランティアに行く社員に会社が旅費・交通費を出して支援しました。そこで全国から集まったボ

ランテアと交流する中で、お金を出す支援だけでなく、自分の身体で体験することが大事だと実感しました。

——社員の皆さんの反響は

会場の参加者がNEWクレラップを喜んで受け取ってくれたことは嬉しかったですね。消費者の方と直接話ができただけで、社員にとっても新しい発見があったようです。参加者と一緒に歩くことで、街頭の一般の方々にもピンクリボン活動の事を認識してもらえる良い機会だと思いました。



ウオークを終えて、キチントさんと一緒に

——スマイルウオーク東京には何名ぐらいで参加されたのですか  
当社の家庭用品を愛用

# がん教育DVD

## 「Dr.中川のよくわかる!がんの授業」が完成

### 文科省選定アニメに中川・東大准教授の出張授業と特別解説入りの決定版



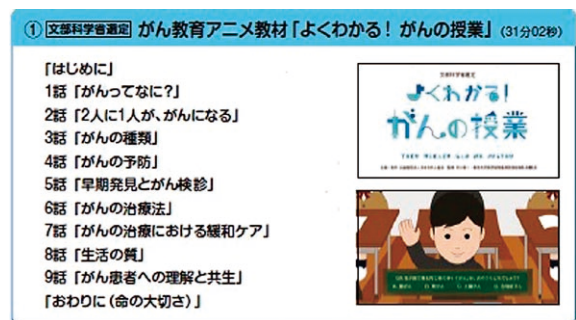
DVDは、がん教育で取り上げるべき内容をクイズ形式でわかりやすく学べるアニメ教材「よくわかる!がんの授業」と、中川准教授がこの教材を使って東京都東大和市立第五中学校で行った出張授業のダイジェスト「Dr.中川がよくわかる!出張授業@東京都東大和市立第五中学校」、このアニメ教材で授業を進めるうえでの補足解説や指導のポイントを収録した特別解説付き教材「Dr.中川がよくわかる!がんの授業」の3本立て。アニメ教材「よくわかる!がんの授業」は、文部科学省

学校教材としてだけでなく、一般の方にもがんの基礎知識が学べる内容になっており、中川准教授の補足解説は、その内容をさらに詳しく、データも加えて説明しており、保健所等での健康セミナーなどで活用できる。

学校や保健所などの公的機関、非営利団体には無料で、非営利目的での利用の場合、一般企業・団体にも送料別1枚400円(税込)で提供する。いずれも送料が別途必要。日本対がん協会のホームページの「がん教育」のページから申込みシートをダウンロードしてメールかファクスで申し込む。問い合わせは、☎03-5218-4771日本対がん協会・本多まで。

日本対がん協会は、文科省選定のがん教育用アニメ動画教材「よくわかる!がんの授業」を学校現場で活用してもらおうと、この教材を監修した中川恵一・東京大学医学部附属病院放射線科准教授のモデル授業の様子や、各項目の補足解説動画などをセットしたDVD「Dr.中川がよくわかる!がんの授業」を作成した。

が公表している「がん教育推進のための教材」の中で示された、がん教育で取り上げるべき9項目の内容に準拠しており、「Dr.中川の解説付きよくわかる!がんの授業」は、指導の手引きとして利用できる。



## がん対策にかかわる研究を助成

### 希望者募集

### 黒川利雄がん研究基金

宮城県対がん協会は「黒川利雄がん研究基金」の2017年度の助成希望者を募集している。1件あたり100万円を限度に、総額220万円の助成を予定している。

対象とする研究は、①がんの疫学および集団検診に関する調査・研究・開発 ②がんの早期発見および治療に関する調査・研究・開発 — の2分野。

応募資格は、がん予防や早期発見をはじめ、がん対策にかかわる研究に取り組む50歳未満の個人・団体で、宮城

県対がん協会の理事か、希望する個人・団体が所属する機関・組織の所属長の推薦が必要。応募は、1個人・1団体、または共同研究グループで1件とし、推薦件数も1人1件としている。

応募方法は、宮城県対がん協会のホームページ(<http://www.miyagi-taigan.or.jp/>)から申請書をダウンロードし、必要事項を記入して〒980-0011仙台市青葉区上杉5-7-30 宮城県対がん協会「黒川利雄がん研究基金」事務局あてに郵送する。申請書

類は、はがきか、FAX(022-263-1548)で取り寄せることもできる。問い合わせは☎022-263-1637へ。

応募の締め切りは3月末日。基金の運営委員会で審査し、結果を5月に発表して6月に交付を予定している。

黒川利雄がん研究基金は、宮城県対がん協会の初代会長、黒川利雄博士の遺志を受け、がん対策の長期的展望を開くために1989年に創設された。2016年度までに112人に対し、総額7,350万円を助成している。